

翻 訳

クラバート
—ソルブの民話(6)¹—

パウル・ネド (編)

大野 寿子 (訳)

ケーニヒスヴァルタ (Königswartha) 近郊のオイトリヒ (Eutrich) 村に、もう何世紀も前からヴェント (ソルブ) 人²の貧しい家畜飼いが住んでいた。彼の小屋の位置からくる極貧の生活環境により、継息子の小さなクラバートは、もう幼い頃からガチョウ番として働かなければならなかった。そして、食糧^{パン}が一層不足すると、時として、知らない人の家の扉の前で物乞いをしなければならなかった。身体は健康で見目麗しいこの少年は、何週間も何ヶ月も、物乞いのためにあちこちさまよった。そのような放浪の末に、彼はとうとうシュヴァルツ-コルム (Schwarz-Collm) 村にやって来た。その村の中の、俗にいう「悪魔の水車小屋」に1人の男が住んでいた。その男は、黒魔術師³としての悪名が広く轟いていたため、敬虔なキリスト教信者からは恐れられ避けられていた。その粉ひきに格別気に入られたのが、この若いクラバートだった。粉ひきはクラバートに尋ねた。

「ひょっとしてお前は、私のところに留まる気があるのかね？ だとしたら、お前は運がいい。お前には私が、とても多くのことを教えてやれるだろうよ！」

少年は同意し、悪魔の水車小屋に留まった。彼の師匠は本当に魔法使

¹ 使用テキスト：Paul Nedo (Paweł Nedo)：Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen: Domowina Verlag 1956. 同書 135-151頁に掲載されている29番目の話「クラバート」(Krabat)。1-28番の話は、「ソルブの民話」として別所にて翻訳済みである (訳者解題参照のこと)。

² ゲルマン諸民族の大移動時、現在のドイツ国土の東側約半分の地域に東方から入植してきた西スラブ系スラブ民族の末裔 (訳者解題参照のこと)。

³ Schwarzkünstler：魔術師、魔法使いと訳しうるが、schwarz (黒い) のニュアンスも必要のため、黒魔術師としておく。

い⁴であり、黒い魔術⁵の師匠だった。彼のところには粉ひき職人が常に12人いたが、実際は、黒い手業の修行者達であった。その数は常に12でなければならなかったし、それを粉ひきの親方は厳守していた。修業時代ならびにお試し期間が終わると、その中の1人がいつも必ずいなくなる。大きな水車が回転し、破滅の手に委ねられるべき不運者を告げていたのだ。というわけで、ちょうど今は弟子が11人しかおらず、クラブアートはその穴埋めにすぎなかった。知力にとっても秀でていたこの少年は、実に気味の悪い親方の知識を瞬く間に習得した。そうなるともう彼は、サタンとのお決まりの契約を結ばなければならなかった。自分がいかなる危険の中に漂っているかが、彼にはわかっていた。しかし、いったん悪い粉ひきに依存すると、粉ひきの力から自由になることはできなかったのだ。重苦しい不安の中で——というのも修業時代がもう終わってしまうので——彼は自分の解放のための策略を企てた。彼は、自分の両親を訪問するために、2、3日の休暇を懇願した。そして認められた。母親は、我が息子がいかなる者の手中にいるのか、そして息子が何を習得したのかを聞いたとたん、長い離別の後の再会の喜びが、最も深い悲しみへととって代わった。少年は激しく泣いた。というのも、いわゆる「消え去る者」選びに参加したくはなかったからだ。

「母さん、僕を救うことができるのはもうあなただけです。もしその気があるのなら、シュヴァルツ-コルム村までいらして下さい。そして、僕を引き渡すよう粉ひきに要求して下さい。彼は、あなたが僕を11人の仲間の中から見つけ出すという条件でのみ、それを認めるでしょう。あなたがどうやって僕を認識すべきか、今あなたに教えます。僕達は、黒いカラス

⁴ Hexenmeister：魔女の親方、あるいは男の魔女と訳すこともできるが、ここでは魔法使いとする。

⁵ Schwarzkunst：単なる魔法と訳すこともできるが、注3同様 schwarz（黒い）のニュアンスを残すため、「黒い魔術」としておく。

の姿に変身して部屋に座っているでしょう。そして鳥がよくやるように、自分自身をくちばしで引っかいているでしょう。仲間はみんな首を左に回しているはずですよ。僕だけが、右側の翼をむしります。よく気をつけておいて下さい。これが、あなたに教えられるたった1つの識別の目印です。見つけたら、『これが私の息子だ！』と、きっぱりと言って下さい。そうすれば粉ひきは、僕をあなたに引き渡さなければならぬのです。というのも、いかなる魔法使いもこのような場合、母親というものには逆らうことはできないのですから。』

こんなに差し迫った懇願を前にして、どんな母親なら態度を和らげずにいられたというのか！クラバートは母からの承諾を得て、安心して自分の雇い主のところへ戻ることができた。何日かしてその母親は、シュヴァルトツェルムへと出かけた。その地では、まさにクラバートが言った通りに事が進んだ。息子と同等のものを自分に報いてほしいと要求すると、彼女は相当暗い部屋の中へと連れて行かれた。その部屋では、1本の止まり木にカラスが12羽止まっていた。粉ひきは彼女に、自分の息子をさっさと指し示すよう促した。何しろそこでは、取り決められた目印通りの出来事が起こっていた。彼女は正しく言い当ててしまったのだ。魔術師は悔しさのあまり歯をギリギリいわせ、押し殺しえない憤怒の中で、右の翼の下をカリカリ搔いていた1羽のカラスを杖で触った。するとそのカラスが、少年クラバートへと姿を変えた。クラバートは母親と共に、そこから直ちに立ち去った。とはいえ、親方が一番大事にしていた魔法の本を持ち出すことは忘れなかった。この盗難ゆえにこの粉ひきは、ひどい敵対心を抱いてクラバートを追跡することになったのだ。

* * *

クラバートは家でまた、常に窮乏と貧困状態となった。お金がなかった。そして渴いたパンは、これまで甘やかされた少年の口に合うものではなかった。彼はすぐさま継父の前に歩み出てこう語った。

「父さん、こんな風ではもう耐えられない。とにかくお金がなくては。もしあなたがまったく持っていないのなら、僕があなたのためにそれを工面して差し上げますよ。」

「で、お前は何を企んでいるのだ？」と父親は尋ねた。

「近々ヴィティヒェナウ（Wittichenau）で家畜市が開催されます。僕は、よく肥えた牡牛に変身しますよ。僕を市場に連れて行って売り飛ばして下さい。とはいえ、まじめな正直者ではなく、カーメンツ（Kamenz）のずるがしこい商人にね！べらぼうに高い値段だけを要求して下さい。あなたはその額を手に入れるでしょう。しかし、あなたがどんなに頼まれても、どんなことがあっても、買い手に頭綱を引き渡してはなりません！そんなことをしたら僕はとんでもないことになるでしょう。というのも僕は、人間の姿に二度と戻れなくなり、肉屋の斧の一撃でお陀仏になってしまうからです。それからお金を持って、すぐさま家に帰ってください。僕はそれについて行きます。これでもう僕達のところを、こんな貧しさが支配することはなくなるでしょう。」

こう言ってクラバートは、父親の反論を気にも留めずに外へ出た。すぐさま年老いた父親は、小屋の前で牡牛のブルブルンという音を耳にした。近寄ってみると、その牡牛が、その種の中でも最も立派な1頭であることがわかった。さて、大勢でにぎわうヴィティヒェナウの家畜市の日がやってきた。父親は、あの牡牛を率いてそこへ到着した。商売人達がこの立派な家畜を一目見るや否や、まさしくその購入を巡って争った。相当な額で売りさばかれた。父親が頭綱を手元に留めた一方で、家畜商人はその牡牛をカーメンツの方向へと連れ去った。そしてその途中、1軒の酒場⁶に立ち寄った。牡牛は家畜小屋に連れて行かれた。そしてその持ち主は大いに酒を飲み、どう見ても大変有利な買い物に歓呼した。飼い主が、牡牛にい

⁶ Schenke：酒場であり宿屋も兼ねている施設のこと。

くらか餌を与えるよう、乳しぼり役の女中に言いつけた。それが行われたとき、この動物が人間の声でこう言った。

「干し草も藁も僕は嫌いだな。脂ののったステーキだったら大好きなんだけどな！」

その女中はたいそう驚いて宿屋の食堂へ急ぎ、あの牡牛は人間の言葉が話せると言った。干し草や藁を断りステーキを欲しがったと。商人達は頭を振って笑った。しかしたった1人だけが、様子を伺いに家畜小屋へと行った。彼がその扉を開けるや否や、1羽のツバメがブーンと音を立てて飛び出した。そのツバメの姿になっていたのはクラバートだったのだ。牡牛は消えてしまった。そしてこの若い魔法使いは、父親よりもずっとはやく、オイトリヒの両親の家へと到着したのである。

* * *

しばらく時が経った。代金として得たお金が底を尽きかけた。そこで、よく似た悪さが新たに企てられた。クラバートが継父にこう言った。

「今度は、馬の姿になった僕を市場へ連れて行って下さい。しかし、つなぎ綱も馬勒⁷も、絶対に一緒に売ってはいけません。両方とも家に持って帰るのです。さもなくば、僕はとんでもないことになるでしょう！」

すぐさまその若者は、見事な若い馬に変身した。父親はその上にまたがり、ヴィヒテナウへと乗って行った。この美しい馬は、あらゆる目利きの注意を引いた。すると、白髭のやや歳をとった1人の男が取り引きに加わった。その男は、最も高い額を提示し、商談は成立した。代金を支払った後、つなぎ綱と馬勒を売り手に渡すことを父親は拒んだ。しかし、その努力もすべて無駄となった。その白髭の男は馬の上にまたがり、全速力で駆けて行った。この男は、あのシュヴァルツ-コルムの粉ひき、つまりクラバートの師匠だったのだ。彼は、自分のかつての弟子の最初の悪さを聞きつけ、

⁷ 馬の頭部につける馬具の一部で、くつわ轡（手綱を付けるために馬の口にかませる）、おもがい面繫（轡を固定するために馬の頭〔耳あたり〕にかける）、手綱等の総称。

魔法の本を持ち出したかどで叱り、場合によっては徹底的に痛めつけてやろうと、とにかく怒りに駆られてやって来ていたのだった。

まず彼は、クラバートに己の力を感じさせた。彼は、この哀れな動物を拍車と鞭でもって、とてつもなく無謀な走行へと駆り立てつつ、森を越え野を越え、藪や茨をぬけて疾駆した。長い疾駆の後、彼は、とある鍛冶場にたどり着いた。そこで彼は走りを止め、まだ蹄鉄を打たれていなかったこの若い馬の蹄に、真っ赤に焼けた鉄を当ててくれるよう鍛冶屋に頼むのだ。鍛冶屋には、その注文はいささか奇妙に思える。鍛冶屋は馬に乗ったこの男に、蹄鉄を自分で選ぶよう促す。双方が通路に足を踏み入れる一方、鍛冶屋の息子が、つながれた汗だくの馬をなにやらいじくりまわしている。そのとき馬が、少年の耳元でこうささやくのだ。

「僕の左耳からはやくおもが面繫⁸を外しておくれ！」

少年はその通りにしてしまう。つなぎ綱が外れるやいなや、馬は姿を消し、クラバートがヒバリの姿で空中へと舞い上がった。すぐさま年老いた魔法使いが、ハイタカの姿でクラバートを追ってくる。この肉食鳥の敏速な翼から逃れられないと悟ると、ヒバリは広々とした泉めがけて急降下し、魚の姿へと変わるのだ。しとやかな乙女が1人、水を汲もうとその泉に近づく。そして、いやはやこれは驚いた。彼女の姿を見つけた魚は、金の指輪に変身して乙女の手へ飛び込むのだ。彼女は嬉しくてたまらなくなり、急いで家に帰る。そこにはもう、あの白鬚の老人が彼女の前に立ち、その指輪を売ってくれるよう頼む。彼はとにかくありとあらゆる努力をし、途方もない値段をつける。彼女はしかし毅然とした態度をとり、その宝石を譲らなかった。無垢な乙女の前では、悪など無力なのだ。

さて、彼はそれでも、彼女の両親の農場近くに留まり続ける。しばらくするとその乙女が、オオムギをエプロンいっぱい抱えて再び出てきた。

⁸ 注7参照のこと。

そのオオムギを彼女はニワトリに撒く。すると指輪が彼女の指からスリリと滑り落ちる。そして指輪が、すぐさまオオムギの粒へと姿を変える。ニワトリ達が餌をついばむ一方で、見慣れないオンドリが気どって歩み寄り、その穀物を食らおうとする。するとたちまちクラバートはキツネの姿に変身し、そのオンドリに電光石火のごとく食らいつき引きちぎる。これが、黒い魔術を使っている最中突然の死に見舞われた、彼の親方の最期だった。

* * *

故郷のオイトリヒに帰った後、クラバートはその土地の君主と知り合った。彼がまさに豚の群れの番をしていた時に、アウグスト強王⁹が馬車で通りかかったのだ。号令に従って、豚がみんな同時に後ろ足で立ち、ロウソクのように背筋をまっすぐ伸ばして国王の前を行進した。王はこのヴェント（ソルブ）のエウメオス¹⁰に気づき、彼をドレースデンへと連れて行った。まずはそのこの宮廷の厨房で、彼を働かせたのだ。宮廷調理番は、あらゆることを興味津々に嗅ぎまわるこの若者が、それほど好きにはなれなかった。

ある時、料理番がヌードルをカットしていたが、ちょうど虫の居所の悪いところにクラバートが折悪しく出くわしたため、クラバートにビントの雨が降り注いだ。ところがこの若いヴェント（ソルブ）の少年は、その仕返しをしたのだ。料理が食卓に供されると、高貴な君主一家がそれに気がつき身を震わせた。ヌードルの代わりに、生きたミミズが目の前に置かれていた。そしてフライドチキンの代わりに、元気なカエルが深皿から跳ね出てきた。そのせいで料理番は解雇されることになった。しかしながら料

⁹ ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト I 世（1670-1733年）のこと（在位1694-1733年）。ポーランド・リトアニア共和国の国王としてはアウグスト II 世（在位1697-1706年、1709-1733年）となる。その怪力ゆえに「強王」、「強健王」、「鉄腕王」と呼ばれ、デモンストレーションとして素手で蹄鉄をへし折ったと言われる。

¹⁰ 『オデュッセイア』第14歌に登場する、豚飼いのエウマイオス（Eumaios）のことと推察される。ポロをまとったオデュッセウスに、なけなしの子豚を提供する。

理番が自分の無実をかたく誓ったため、国王はこの悪ふざけの本来の教唆者をすぐさま見破った。その罰としてクラバートは、宮廷の厨房をクビになった。

* * *

クラバートは再び両親の家を訪れ、そこで見目麗しい若者へと成長した。ある日、その当時の習慣に従い、夜に突然ザクセンの徴兵官達が現われた。彼らはこの小さな村を包囲し、役に立ちそうな若者を力づくで兵役へと引きずり込んだ。クラバートもまたこの運命に遭遇した。彼はドレースデンの歩兵連隊に組み入れられた。そうこうするうちにトルコ戦争¹¹が勃発した。そしてクラバートはマスカット歩兵¹²として、かの大作戦のど真ん中にいるのだ。すると、国王がトルコ軍¹³に捕えられ、ある方陣内で厳重に監視されることとなった。〔神聖ローマ〕帝国およびザクセンの将官達が憂慮しつつ並び立ち、自分達の最高司令官をいかにして救い出すことができるか協議した。そこにクラバートが歩み寄り、司令官達に名乗り出た。そして、司令官達の困惑が自分にはよくわかること、さらには、自分以外の誰も最高司令官を生きのまま奪還することはできないことを告げた。とはいえ彼らは、信用できないと肩をすくめるしぐさをした後、クラバートをしたいようにさせたのだった。彼は叫んだ。

「鞍を付けた馬を私にくれ！とにかくはやく！というのももう1時間しか残されていないんだ！」

駄馬が連れて来られた。クラバートは最初の区間はまっすぐに走行した。それから空中に舞い上がったため、彼のほんの小さな一部分しか見えなく

¹¹ 大トルコ戦争（1683-1699年）のことと推察される。ハンガリーやトランシルヴァニアをめぐるオーストリア、ポーランド、ヴェネツィア、ロシア等の神聖同盟（ローマ教皇インノケンティウス11世指揮）とオスマン帝国の戦争。実際の指揮官の1人が、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグストI世。

¹² 火縄銃の一種であるマスカット銃（Musket）で武装した歩兵。

¹³ 正確にはオスマン帝国。

なった。遠く離れたトルコ軍の宿営地に到着すると、彼の姿は、国王以外のすべての者から見えなくなった。国王は、裾の長い燕尾服を着て長いマスケット銃を持った歩兵が、自分のかつてのお気に入りだとすぐに気づいた。

「お前はどこから入って来たのだ？なぜここにいるのだ！」と国王は尋ねた。

「あなた様をお救いするためです、陛下。急いで私の燕尾服の裾におつかまり下さい。そしてたとえ何が起ころうとも、どうぞ心配召されますな！」

国王はその要請に従った。そして空中へと消えていった。高貴な捕虜が、尋常ではない力の助けでいなくなったことにトルコ軍が気づいたとき、彼らは、自分達の軍隊の中に黒魔術師が仕えていることを思い出した。この魔術師は、すぐさま逃亡者を追跡しなければならなかった。一度も振り返ることのなかったクラバートは、しばらくして、自分達の後を誰かが追っかけて来ているかどうか国王に尋ねた。

「ああ、大きな黒い鳥が1羽、我々を追いかけて来ているぞ。だんだん近づいて来ているぞ」と答えが返ってきた。

そこでクラバートは魔法を使って、自分達の背後に真っ暗な霧を作り出した。追手の方を振り返ることなく再び尋ねた。鳥は相変わらず一定の距離を保って、彼らの後を飛んでいるとの答えだった。そこでクラバートは、言い表せないほど高い壁をそびえさせた。しかしこれもまた、攻略不能な障害とはならなかった。追手の鳥は、何の苦もなくそれをヒラリと飛び越えた。

「まだ誰かが追って来ていますか？」とクラバートが尋ねた。

「ああ、鳥がもうすぐ後に来ているぞ」と国王が言った。

「あなた様の軍服の金のボタンを1つ引きちぎって、私にお渡し下さいまし！」とクラバートが叫んだ。

そのボタンが銃の中に込められた。そしてクラバートは、狙いも定めず

振り返りもせず、肩に担いだ銃を後方へと撃ち放った。追手の鳥が消え去った。空を耳をつんざくような幾度とない断末魔の叫び声に、クラバートは身をすくませ泣き始めた。

「お前は何を悲しんでいるのだ？」と国王が尋ねた。

「陛下、お聴き下さいまし。私は先ほど、親友を撃ち殺してしまいました。あの断末魔の叫びであいつだとわかったのです。私共はかつて、同じ時期に同じ師匠の元におりました。ああ、よりもよって、かつての同志を永遠に葬り去ることになるなんて！やっぱりあれはあいつだ。あいつは魔法任務遂行中に殉職してしまったんだ。もしあいつだとわかっていたら、別の方法で切り抜けることもできただろうに。」

このように悔みながらも、不可思議な飛行が続けられた。

* * *

運よく自身の軍勢のところへ帰還した後、国王は、自身の救済者に豪華な報酬を約束した。大作戦終了後、国王はふさわしいやり方で仕返しをしようとした。そこで真っ先に国王は、もう一度クラバートの魔術を使った。首尾よく戦争に勝利するために、トルコ軍統帥の秘密の作戦を、偵察して確認したいと思ったのだ。そんな国王を助け、それを可能にしたのがあの魔法使いだった。2人は2匹のハエに変身し、スルターン¹⁴の司令部での会話を盗み聞きした。クラバートは国王に、銀のスプーンの上には決して止まらないように前もって注意していた。

さて、クラバートが虫の姿で、スルターンの料理用深鉢の縁を安定感を持って這い回る一方、国王バエはブンブン飛び回りながら、うっかりスプーンに触ってしまった。すぐさま、テーブルの下に寝そべっていた大きな犬がうなり始めた。人間の姿をトルコ人達の前にさらしてしまった2人のスパイは、ただちに逃げ出した。彼らを阻もうと立ちはだかった1人のトル

¹⁴ イスラム世界の君主の呼び名で、国王や皇帝とも訳すことができる。ドイツ語では、ズルタンと発音する。

コ兵の頭の上に、クラバートは鉄の車輪をかぶせた。その輪は見る見るうちに縮んで、解けない首輪のようになった。そうやって2人は逃げ出したのだった。

戦争が終わった。恩義を感じた国王は自分の居城に戻った後、彼の救済者に膨大な額の褒美をとらせた。しかしクラバートは、謙虚にもすべて断った。それでも何らかを願い出るよう、侯爵がクラバートにしつこく迫ったので、ようやく彼は、ホイヤースヴェルダ（Hoyerswerda）近郊の領地グロース-ゼルヒェン（Groß-Särchen）を所有したいと願い出た。

「あの大きなカモの水たまり〔のような湿地〕以外何も欲さないというのなら、それは永久にそなたのものとなるだろう」と国王は言った。

* * *

今や領主となったクラバートと国王の間には、友好関係が芽生えた。このかつてのマスケット銃歩兵は、差し出された国家のどの役職にもつかず、自分の敬愛する国王の私設顧問官にして相談役に生涯あまんじた。そのような立場で彼は、いついかなる時でも、予告なしに国王の食卓で食事をしてもよいという許しをもらったのだ。それを彼は本当によく使った。午前11時に彼は、自分の食器セットを持ってグロース-ゼルヒェンを出発し、12時ちょうどにはドレースデンの国王の城の中にいた。このとてつもない走行は、カーメンツおよびケーニヒスブリュック（Königsbrück）越えだった。

時の経過と共に、宰相よりも影響力があると見なされたこの国王のお気に入りに入り、嫉妬する者も現れた。その中でも12人の高官は、自分達がとりわけ冷遇されていると思っていた。彼らの恨みはそれでも、この優遇された人畜無害な人間ではなく、むしろ、国王そのものへと向けられた。彼らはしかも、国王を1杯のお茶で毒殺しようと共謀したのだ。そこで彼らは、国王陛下が卒中発作によって突然みまかられたという噂を、意図的に広めた。クラバートはグロース-ゼルヒェンの自宅で、この国事犯的暗殺計画

を——共謀者の人物像や示し合わされた犯罪実行時刻までも——察知した。これらすべてをクラバートに密告したのは、真鍮製の魔法の鏡だった。極めて急を要した。というのも同日夕刻に、国王暗殺が実行されることになっていたので。彼は急いで馬を用意させた。

「今回は私が自分で手綱をとる！」とクラバートは御者に合図した。「とにかく馬車の中に座っていなさい！ 30分以内に私は国王の元に参じなければならないのだから。」

さて、つるべ落としのごとく日が暮れて秋の夜となった。村の前で、車輪のガラガラいう音が突然しなくなった。馬と馬車が音もなく空中へと舞い上がった。何もすることなく、慣れない柔らかなクッションに座りながら、御者はいつしか眠り込んだ。そして目覚めたのは、強烈な衝撃によって走行が遮られた時のことだった。御者は心配になり叫んだ。

「私達はきっと境界石に乗り上げてしまったに違いない！」

そして、馬車を再び走れるようにするために外へ出ようとした。しかしクラバートは彼に、座ったままでいるよう頼んだ。クラバートは、カーメンツの教会の塔の先端に引っかかってしまった馬車を、なんとか外した。（そんなわけで、カーメンツの教会のこの鉄製の風見棒は、この出来事から今日に至るまで、少々ひん曲がったままなのだ！）

決定的な瞬間の直前にクラバートは、ドレースデンの王の館に到着する。晩餐会がもう始まっていた。国王はもうその手に、毒薬の入ったカップを持っている。そこにクラバートが転がり込んで、飲まないよう懇願する。献酌侍従に、前もってお茶に口をつけさせるよう頼んだのだ。国王はその提案に従う。国王の命令に献酌侍従は従うしかない。献酌侍従はすぐさま死んだ状態で床に倒れる。謀反者達が洗いざらい化けの皮をはがされ、死刑を宣告されるのだ。死刑執行のためにクラバートは、自分の知っている老いた死刑執行人のブンダーマンを、ネシュヴィッツ（Neschwitz）近郊のリサホラ（Lissahora）からドレースデンへと招聘した。そしてこの者が

死刑を執行したのだった。

他の多くのクラバートの不思議な所業についても、ヴェント（ソルブ）の民は互いに噂し合っている。しかしながらそれらすべての列挙は、読者の忍耐をあまりにも長く煩わせるであろう。したがって、すぐさま伝説の結末へと導こう。

* * *

この伝説は和やかに鳴り終わる。クラバートは、彼の領地および全周辺地域の後援者にして慈善家となった。歳をとってからのクラバートは、自身の魔術を、家臣の主食の〔麦の〕穂を持ち上げ回復するためにのみ使用した。収穫の乏しい彼らの耕地の土壌を改良し、一晚のうちに熱〔病〕を引き起こすような沼地をとり除き、乾ききった種に水を与えた。そして、周辺地域をひどく荒廃させ、彼の村の境界線を越えてこちら側に落下してきそうな雹粒を、害なくヒラヒラと舞い落ちる綿羽に変えてみせた。彼はたゆまず、資財のない貧しい己の民のために仕事をした。自分には子孫ができなかったので、最終的に自分の全財産を40の区分に分割し、遺言により民に譲渡した。その場合、裕福な農夫だけは何の収穫も得られずに終わった。そして、君主が手元に残しておいたグロース-ゼルヒェンの湿地が、その裕福な農夫に復帰した。

死の直前にクラバートは、手元にあった魔法の本を大きな池に投げ捨てさせた。家来ははじめのうちは、その依頼を実行しなかった。彼は、ひそかにその書を自身の手元に置こうとしたのだ。家来が返ってきた際に、クラバートが尋ねた。

「おまえはあの書を池に沈めたのだな？」

「はい、ご主人様。あの書は池の中です」と家来は答えた。

クラバートは彼を鋭く注視してこう言った。

「で、水は何と言った？」

というわけで家来は何の言い訳もできず、もう一度赴かねばならなかつ

た。今度こそ彼は、その本を本当に暗い水の中へと沈めた。その際、水がシューシューと音を立ててたぎりたち、雷の轟と共に大人の背丈程に立ち上った。（後の話ではこの代わりに、冬でさえもぞっとするような騒音と共に、池の氷の覆いを持ち上げる怪物の存在が付言されている。）

クラバートの最期の寝床が、グロース-ゼルヒェンの宿屋にしつらえられた。親切や宿屋の主人夫妻が、誠心誠意彼の看護に携わった。彼は、自分のベッドの周りを囲んでいる誠実な者達に、自分のあの世での運命に、十分注意を払うべきだといった。彼の靈魂が肉体というこの世の覆い（外皮）から離脱したとき、死を迎えた家の煙突に1羽の黒いカラスが止まっていたならば、彼は永遠に破滅しているだろう。しかし、もしそこに白いハクチョウが1羽見られたなら、彼は死後の至福を得られたこととなるだろう。

すべての善良な家臣達が、敬愛する主人の最期に、家の前へと集まっていた。深く重苦しい沈黙の中、彼らは、主人が亡くなったという知らせを待った。クラバートは、長い闘病の末亡くなった。すぐさま死者の部屋に集った者達が、ヴェント（ソルプ）の葬送曲を歌い始めた。そして、すべての眼差しが上方へと向けられた。屋根の棟木の上では、1羽のハクチョウの白い羽毛がキラキラと輝いていた。

〔出典：『ザクセン地方の色とりどりの表象』第Ⅲ巻、1900年、191頁〕

【パウル・ネドによる注釈】¹⁵

形式と内容に関してはメルヒェンの範疇を越えているこの話を、G・ピルク博士（Dr. G. Pilik）が、ビショフスヴェルダ（Bischofswerda）の『ザクセンの語り手』（Sächsische Erzähler）の挿絵付き付録14番（1896年4月4日採録）にドイツ語で報告し、その直後に、『ラウジッツ—娯楽と教訓

¹⁵ 使用テキスト：パウル・ネド『ソルプの民話—概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社（パウツェン）、1956年、377-180頁。注7参照のこと。

のための月刊誌』¹⁶〔以下、『ラウジッツ』Lžaと略記〕1896年の26-29号、35-37号にソルブ語(ウージャン [Lužan] による翻訳)で報告した。ピルクはこの話を、『ザクセン地方の色とりどりの表象』(Bunte Bilder aus dem Sachsenlande)の中で、自身のドイツ語で再度出版している。(ボルテ/ポリーフカ『注釈書』¹⁷、第Ⅲ巻、1900年、191-201頁)。『ザクセンの語り手』が入手不可能なため、本書ドイツ語(のテキスト)として我々は、『色とりどりの表象』に掲載されたテキストを採用した。ソルブ語テキストでもドイツ語テキストでも、ピルクの序文と注釈は省略した。

ピルクが述べたことには、この話は彼の年老いた叔父から入手し、叔父の名前を明かさず伝えているという(『ラウジッツ』Lža、1896年、36頁)。我々の頼みでエーバースバッハのヴェルナー・アンデルト(Werner Andert)が調達してきたこのピルクの遺稿の点検によれば、この叔父とは、ピルクの母親の兄弟アドルフ・アンデルス(Adolf Anders)のことであると推察してもほぼ差し支えないだろう。アドルフは、ネシュヴィッツ(パウツェン圏内)近郊のルガで領主の召使いをしており、ログアへの婿入りによって、その村の小さな旅館の所有者となった。

ピルクのテキストは数度にわたり復刻された。まず、J・T・ムチンク『ラウジッツのクラバート伝説』、1902年、ゲビルクスフロイント、69頁¹⁸(大変不精確かつ不鮮明な語り口)。A・マイヒェ『クラバート伝説—ザクセン王国の伝説本』、1903年、538頁¹⁹。さらに、要約された形では、F・ズイー

¹⁶ Lužiča, časopis za zabavu a powučenje (Die Lausitz. Monatsschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1882-1937. 『ラウジッツ—娯楽と教訓のための月刊誌』、パウツェン/ブディシン)、1882-1937年刊行。

¹⁷ J. Bolte/ G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32. [J・ボルテ/G・ポリーフカ『グリム兄弟《子どもと家庭のためのメルヘン集》注釈書』、全5巻、ライプツィヒ、1913-32年刊行。] (以下、ボルテ/ポリーフカBPと略記)

¹⁸ J. T. Mutschink: Die Krabatsagen in der Lausitz. Gebirgsfreund 1902, S. 69.

¹⁹ A. Meiche: Die Krabatsage. Sagebuch des Königreichs Sachsen. 1903, S. 538.

バー『ヴェントの伝説』、1925年、58頁²⁰。文学的に再編成されたものとしては、M・ノヴァック-ノイマン『クラバート親方』（ソルブ語・ドイツ語版）、ベルリン、1955年²¹。

我々が採用した話は幾重にも裏付けられており、その最も初期の証拠は、『新ラウジッツ雑誌』（Neues Lausitzer Magazin）、1837年、203頁に存在し、ハウプトの『伝説本』²²第I巻、184頁に復刻されている。ここに再度掲載する。

〔グロース-ゼルヒェン（Groß-Särchen）の悪徳領主について〕

ホイヤースヴェルダ（Hoyerswerda）のグロース-ゼルヒェンにはかつて、悪徳極まりない領主がいた。この者は、その土地の傍を流れている小川を別の方向に流れさせるために、鋤き返して耕した。しかし、それに興奮したポーランドの牡牛を手なずけることができなかったので、小川は今のような曲がりくねった流路となってしまった。この領主は、しばしば驚くべき短時間でドレースデンへと移動した。いつも彼自身が馬を操り、御者には、後の馬車の中で寝ているよう命令した。しかしあるとき、御者が目を覚ました。そしてあたりを見渡すと、この旅が、地上ではなく空中を走行していることに気がついた。驚愕のあまり彼は、大声で叫び起き上がろうとした。ところが彼の主人は御者をたいそう脅し、再び静かに横になっているよう命令した。さもなくば2人とも、とんでもない目にあってしまうかもしれないのだ。この会話の間にもう、2人には危険が迫っていた。というのも、主人が注意を怠ってしまったため、馬達が十分な高度を保てなくなってしまう、馬車がカーメンツの塔の天辺に衝突してしまったのだ。その塔の切っ先は、なお今日に至るまで、そのせいでグニヤリと曲がって

²⁰ F. Sieber : Wendische Sagen. 1925, S. 58.

²¹ M. Nowak-Neumann: Mištr Krabat (Meister Krabat). Berlin 1955.

²² K. Haupt: Sagenbuch der Lausitz. Bd.I und II. Leipzig 1862-1863. K・ハウプト『ラウジッツの伝説本』第I巻、第II巻、ライプツィヒ、1862-1863年刊行。

しまっている。

この領主は時おり、黒いオート麦をタイル製の鍋に入れ、それにいくつかの言葉を放った。するとすぐに兵士が姿を現した。最初はオート麦よりも小さかったが、見る見るうちに大きくなり、とうとう人間の姿になって城の館に勢ぞろいし、その領主の命令に従うかのごとく、あちらこちらへと行進した。それから領主がいくつかの呪文を唱え、兵士達はだんだんと小さくなり、全員が再び鍋の中へと入って行ったのだ。のぞいてみると、そこにはもう黒いオート麦が入っているだけだった。あるとき、下男頭が聞き耳を立ててその呪文を覚え、領主がちょうど畑に出ているすきに、この芸当を自分でも試してみた。彼がやってもうまくはいったが、兵士達を再び鍋の中へと入れようとしても、その呪文がわからなかった。すると兵士達は下男頭に襲いかかり殴りかかり、彼が死の危険に陥った。兵士達が発する物音があまりにも大きかったため、畑にいる領主の耳に入った。領主が駆けつけ、出しゃばり下男頭を助け出し、野蛮な兵士達にオープン鍋の中へ入るよう命令し、彼らはまたオート麦となった。

さらなる資料としては、M・フルニク「クラバート—民による伝説」(『週刊新聞のための月次付録』、1858年、22号)²³であり、それが『ラウジッツ』Lža、1896年、109号に再録される。さらに、J・G・クーバシュ「クラバート (民間より)」(『ラウジッツ人』、1865年、168号)²⁴がある。このバージョンをプラハ在住のソルブ人学生達が、自分達の雑誌『ソルブの花』²⁵の

²³ M. Hórník: Krabat. Powěstka z ludu (Krabat. Eine Sage aus dem Volke) Měsačný Příkladník (Monatsbeilage zur Wochenzeitung), 1858-1859.

²⁴ Lužičan, časopis za zabawu a powučenje (Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1860-81. [『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』、パウツェン (ブディシン)、1860-81年。] (以下、『ラウジッツ人』Lžnと略記)

²⁵ Kwětki Serbowki (Blumen der Serbowka). Hdschr. Zeitschrift des sorbischen Studentenvereins Serbowka in Prag. 1846-1922. [『ソルブの花』、プラハのソルブ人学生組合「セルボウカ」の手製雑誌、1846-1922年。] (以下、『ソルブの花』Kwと略記)

1861年号にすでに記載していた。それが、『ラウジッツ』Lža、1896年、58号に再録された。H・ヨルダン「魔法使い (ブラーニッツより)」²⁶ (『ソルブの母』ČMS、1879年、63号)²⁷も同様に、それがフェッケンシュテット『ヴェントの伝説』²⁸の257頁にドイツ語テキストで、490頁にソルブ語テキストで取り入れられる。『ヴェントの伝説』Vkstの257頁「魔法使いの見習い」は、ラーベナウ (Rabenau) によるものであり、彼はこのバージョンを自著「ヴェント人のオリジナル・メルヒェン」の98頁に再び掲載している。²⁹ J・ゲーリッチ (J. Góř) の「クラバートのメルヒェン」³⁰が、『ラウジッツ』Lža、1885年、90号に収録される。プフル博士 (Dr. Pful) の「クラバート」(Krabat) が『ラウジッツ』Lža、1885年、90号に収録される。さらに、M・ビードリヒ (M. Bjedrich) の「空中の魔術師」³¹は、シェフチック『メルヒェンと物語』³²の57に収録される。このシェフチックによって報告されたバリエーションは、そのモチーフ構成に関していえば、我々の他のバリエーション群の骨子からは完全に外れている。これは明らかに、よその素材 (資料) の再話である。

²⁶ H. Jordan: Koklařiski (Der Zauberer). Z Rogańca (aus Branitz).

²⁷ Časopis Maćicy Serbskeje (Zeitschrift der "Maćica Serbska" = "Sorbische Mutter"). Budyšin-Bautzen 1848-1937. [学術雑誌『ソルブの母』、パウツェン (ブディシン)、1848-1937年刊行。] (以下、『ソルブの母』ČMSと略記)

²⁸ E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880. [E・フェッケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』、グラーツ、1880年。] (以下、『ヴェントの伝説』Vkstと略記)

²⁹ A. Rabenau: Originalmärchen der Wenden. In: E. Kühn: Der Spreewald und seine Bewohner. Cottbus 1889. [A・ラーベナウ「ヴェント人のオリジナル・メルヒェン」、E・キューン『シュプレーの森とそこに住む人たち』、コトブス、1889年。]

³⁰ Bajka wo Krabaće (Das Märchen von Krabat).

³¹ Kuzlar w powětrje (Der Zauberer in der Luft).

³² J. Šewčik: Bajki a basnički. Jubiliejne spisy "Serbowki". III. Zešiwk (Märchen und Erzählungen. Jubiläumsschriften der „Serbowka“. Bd. III). Budyšin-Bautzen 1899. [J・シェフチック『メルヒェンと物語』、「セルボウカ」の記念雑誌、Ⅲ号、パウツェン (ブディシン)、1899年。]

我々ソルブの物語というものは、ある歴史的な核（事実）に絡みついている。クラバートが、グロース-ゼルヒェンに住むクロアチア人騎兵大尉ヨハン・シャドヴィッツ (Johann Schadwitz) と同一人物であることは疑いようもない。すでにF・フィッシャー (F. Fischer) が、自著『ヴィヒテナウ年代記』(Chronik in Wittichenau, 1878年) の31頁にそのことを報告している (以下ソルブ語テキストのドイツ語訳を記す)。

1704年5月29日にグロース-ゼルヒェンにて、退職騎兵大尉ヨハン・シャドヴィッツ死亡。享年80歳、クロアチアのアグラム生まれ、ヴィヒテナウの教区教会に埋葬。1695年に対トルコ戦争の最高司令官として皇帝軍を率いたザクセン選帝侯アウグスト強王は、クロアチアのある騎兵大尉に、グロース-ゼルヒェンの土地を生前すでに与えており、それに対する感謝から彼はかつて、自分の騎兵と共に選帝侯を、敵であるトルコ軍の手から救い出したのだ。世間一般において、このクロアチアの騎兵大尉は「クラバート」と呼ばれ、魔法使いと見なされている。そしてこう語られている。

クラバートはヴィヒテナウで、片手一杯のオート麦を、タイル製の鉢に投げ入れた。すると一連隊の兵士達がそこから飛び出し、司祭館（教会）の上を行進した。クラバートはゼルヒェンからドレースデンまで、選帝侯の元での昼食のために空中を駆け抜けた。そしてその際にカーメンツで、塔の先端部分を隠してしまった。クラバートの死後、彼の魔法の書物は小川に投げ捨てられた。すると水が、あたかも川床から飛び出そうとするかのごとく、泡立ち吹き上がった。この伝説はもちろ^ん、ヴィヒテナウの埋葬記録には何も記載されていない。

この歴史上の人物に、メルヒェンや物語のモチーフが絡みついているのである。我々の物語の最初の部分は、魔法見習いのメルヒェンから構成

されている。KHM³³68番「泥棒見習いとその親方」とそのBP(ボルテ/ポリーフカ)『注釈書』第Ⅱ巻、60頁に、さらなる伝播が記されている。チェコの類話は、ティレ (Tille)³⁴「チェコのメルヒェン作品集」Ⅰ巻、132頁と『ボヘミアのメルヒェン目録』³⁵ (FFC³⁶34巻) の299頁に掲載されている。スロヴァキアの類話はポリーフカ (Polívka)³⁷の第Ⅳ巻、216頁に掲載されている。ポーランドの類話は、クジジャンフスキー (Krzyżanowski)『ポーランドの民間メルヒェン』³⁸第Ⅱ巻、30に掲載されている。ヨルダン (Jordan)³⁹、クジジャンフスキー、ラベナウ⁴⁰の著書に収められた我々低地

³³ KHM = Kinder- und Hausmärchen. グリム童話収集刊行『子どもと家庭のメルヒェン集』(通称『グリム童話』)。第1巻第1版(1812年)、第2巻第1版(1815年)。以後、第2版(1819年)、第3版(1837年)、第4版(1840年)、第5版(1843年)、第6版(1850年)、第7版決定版(1857年)。創作童話ではなく伝承文学としての民間メルヒェン(民話)という位置づけ。第7版(決定版)には、「メルヒェン」というジャンルで201話(通し番号は200番まで)、「子どものための聖人伝」というジャンルで10話が収録されている。

³⁴ V. Tille: Soudis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen). I. Rozprawy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 66. Praha 1929; II/1. Rozprawy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 72. Praha 1934; II/2. Rozprawy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 74. Praha 1937. [V・ティレ『チェコのメルヒェン作品集』、Ⅰ巻、チェコ・アカデミー報告『学問と芸術』第Ⅲ巻66号、プラハ、1929年。Ⅱ巻第1部、『学問と芸術』第Ⅲ巻72号、プラハ、1934年。Ⅱ巻第2部、『学問と芸術』第Ⅲ巻74号、プラハ、1937年。]

³⁵ V. Tille: Verzeichnis der böhmischen Märchen. FFC 34. Helsinki 1921. [V・ティレ『ボヘミアのメルヒェン目録』、FFCシリーズ34巻、ヘルシンキ、1921年。]

³⁶ FFC = Folklore Fellows' Communications. フィンランド学術アカデミーが1910年より発行している民俗学分野(とりわけ民間伝承研究)の研究雑誌『民間伝承研究会報告』。

³⁷ J. Polívka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931. [J・ポリーフカ『スロヴァキアの民間メルヒェン作品集』全5巻、マルティン、1923-31年刊行。]

³⁸ J. Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym (Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung). 1. Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zaubermärchen) Warszawa 1947. [J. クジジャンフスキー『体系的に配置されたポーランド民間メルヒェン』、第Ⅰ巻「動物メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。第Ⅱ巻「魔法メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。]

³⁹ H. Jordan: Najrjeńše ludowe bajki. 1. zešiwk (Die schönsten Volksmärchen. 1. Heft). Wojerecy- Hoyerswerda 1876. [H・ヨルダン『最も美しいメルヒェン集』、ホイアースヴェルダ(ヴォイエレット)、1876年。]

⁴⁰ 注29参照。

ソルブの類話には、クラバートとの関連性なしで刊行されている。魔法見習いに関するソルブのバリエーションは、フェッケンシュテット『ヴェントの伝説』Vkstの257頁における伝説めいた結末以外、独自の特徴をほとんど有していない。

本来のクラバート物語においては、魔法使いの親方物語や奇術師物語より知られている諸モチーフが姿を現している。それにもかかわらず、ピルクによってここに報告されたバージョンのみに、強烈な社会批判が目立つ。クラバートは、このバージョンでは、虐げられた世襲隷属農民の願望と憧れの化身と化しており、その願望と憧れが、まさになえられているのである。創作的再編成の実にすばらしい例と言えよう。

以下の書も参照のこと。パウル・ネド「クラバート—民主的ソルブ民間説話の成立について」、『民俗学ドイツ年鑑』、ベルリン、1956年。⁴¹

【訳者解題】⁴²

1. ドイツの少数民族ソルブ人について

ザクセン州南東部、チェコとの国境に近い山岳地帯を源流とし、ベルリン市内に向かって流れるシュプレー川。その山岳地帯よりベルリンの南南東約50キロのシュプレーヴァルト地帯 (Spreewald/ Blota)⁴³に至るまでの南北約100キロ、この川を中心に東西約50キロの地域はラウジッツ (Lausitz/ Łužica) と呼ばれている。厳密には、ブランデンブルク州南東部の町コト布斯 (Cottbus/ Choćebus) を中心とする低地ラウジッツ、ザクセン州東部の町バウツェン (Bautzen/ Budyšin) を中心とする高地ラウジッツの両地

⁴¹ P. Nedo: Krabat. Zur Entstehung einer demokratischen sorbischen Volkserzählung. Deutsches Jahrbuch für Volkskunde. Berlin 1956.

⁴² 「ソルブの民話 1 (パウル・ネド編)」(1998年4月、東ドイツ文学会〔イルムの会〕「東ドイツ文学」第4号)の5-44頁に記された拙文【解説】に加筆修正を施し、新たに掲載を試みた。

⁴³ 丸カッコ内左側がドイツ語表記、右側がソルブ語表記。以下同様。

域より成り、それぞれ低地ソルブ語（Niedersorbisch/ Delnjoserbscina）を話す低地ソルブ人、高地ソルブ語（Obersorbisch/ Hornjoserbscina）を話す高地ソルブ人が住んでいる。

ソルブ人とは、ゲルマン諸民族の大移動時に現在のドイツ国土の東側約半分の地域に東方から入植してきた西スラブ系スラブ民族の末裔のことである。彼らの名は、歴史的にはむしろヴェント人（Wendisch）の名で知られている。ザクセンシュピーゲルが定められて以来、ヴェント語（ソルブ語）の使用は禁止され、また民族的にも蔑まれた形のまま第二次世界大戦に至った。しかしながら戦後の旧DDR（東ドイツ）体制下では一転して国家的優遇措置がとられ、ソルブ語自体も旧東独の公用語として認められ、様々な民族文化組織の活動が盛んとなった。ところが東西ドイツ統一以降、彼らは、政府という財政的な後ろ盾を失う結果となる。また全員がドイツ語とのバイリンガルであるソルブ人の総人口は、現在約7万人を切ったとも、5万を切ったとも言われており、民族文化、そして何より言語そのものをどう保持していくかが今後の課題となっている。

2. 使用テキストについて

本テキストは、パウル・ネド（Paul Nedo/ Paweł Nedo）により編集され、バウツェン所在のソルブ民族研究協会論文集第IV巻として、バウツェンのドモヴィナ出版社（Domowina Verlag）から1956年に刊行された研究書、『ソルブの民話（民間メルヒェン）—概説と注釈をほどこした体系的文献一覧』（Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen）である。

同書は大きく分けてAとBの2つの部門から構成されている。「ソルブの民間メルヒェンについて」と題されたA部では、概説、収集研究の歴史、メルヒェンの語り手、言語的特異性、ソルブ・メルヒェンの特徴等について記され、「メルヒェンテキスト」と題されたB部には、ソルブ・メルヒェ

ンが通し番号で86番まで収録されている。実際は、各話に類話加わるため、全119話となっている。

これらの話は、アールネ／トンプソンの『民話のタイプ』(The Types of the Folktale, FFC74. Helsinki 1928) に基づいて以下のように構成されている。

- 第1部 動物メルヒェン (1～21番)
- 第2部 魔法メルヒェン (22～70番)
- 第3部 聖人伝風メルヒェン (71～75番)
- 第4部 短篇小説風メルヒェン (76～82番)
- 第5部 おろかな悪魔のメルヒェン (83～86番)

ここに綴られたメルヒェンは、ネドが語り手の話を直接書き起こしたものではないが、彼以前の民間伝承収集研究者達の手によりソルブの雑誌、新聞等に記載されていた膨大な記録の中から選出、体系化された貴重な研究資料である。この文献集は、ネドの手により10年後の1966年、同研究協会著作集32巻として刊行される『ソルブ民間文芸概説』(Grundriß der Sorbischen Volksdichtung, Bautzen) の先駆けであり、ソルブ口承文芸研究史上、重要な位置を占めるものである。

3. 当該翻訳「クラバート」の位置付けについて

『ソルブの民話 (民間メルヒェン) 一概説と注釈をほどこした体系的文献一覧』の翻訳は、1998年より段階的に始めており、通し番号で1番から28番まで、類話も入れて全39話はすでに、東ドイツ文学会〔イルムの会〕編の学術雑誌「東ドイツ文学」に拙訳で以下のように掲載されている。

1. 「ソルブの民話1 (パウル・ネド編)」(1998年4月、「東ドイツ文学」)

- 第4号、5-44頁)
2. 「ソルブの民話2（パウル・ネド編）」（2004年5月、「東ドイツ文学」第6号、22-40頁）
 3. 「ソルブの民話3（パウル・ネド編）」（2010年9月、「東ドイツ文学」第9号、5-29頁）
 4. 「ソルブの民話4（パウル・ネド編）」（2011年10月、「東ドイツ文学」第10号、5-33頁）
 5. 「ソルブの民話5（パウル・ネド編）」（2011年10月、「東ドイツ文学」第10号、34-52頁）

しかしながら、東ドイツ文学会が2012年をもって活動を停止し、解散の運びとなった。今回の翻訳は、事実上は「ソルブの民話6」にあたる翻訳であるが、掲載誌を変更せざるを得なくなった経緯に加え、1話が大変に長編であったため、「ソルブの民話」ではなく、メルヒェン・タイトルの「クラバート」という主題での掲載を試みた次第である。上述の学術雑誌における既訳のメルヒェン・タイトルは、以下の通りである。

第I部 動物メルヒェン

1. オオカミの不運な魚釣り（「ソルブの民話1」に掲載、以下同様）
 - 2a. 殴られた方が殴られなかった方を背負う
 - 2b. キツネとオオカミは仲間どうし
3. キツネとオオカミ
 - 4a. クマ、イノシシ、オオカミが、イヌ、ウサギ、ネコと戦う
 - 4b. オオカミとキツネの戦い
5. ネズミ
6. 牡ネコとネズミたち
7. オオカミの幸運な日

- 8 a. オオカミと三匹のヤギ
- 8 b. オオカミと三匹のヤギ
- 9. ブタ、ガチョウ、ヤギとオオカミ
- 10a. 四匹の楽師 (要旨) (「ソルブの民話 2」に掲載、以下同様)
- 10b. 追い出された者たち
- 11. キツネの中に男の子が一人
- 12. 年寄りクマと若いクマ
- 13a. 年寄りキツネのお話
- 13b. キツネとグレーハウンド
- 14a. クモとハエ、ネコとネズミの敵対関係はどこからきたか (「ソルブの民話 3」に掲載、以下同様)
- 14b. イヌとネコとネズミの敵対関係
- 15a. コウノトリとミソサザイとフクロウ
- 15b. ミソサザイ
- 16. 四足で歩くもの (動物) と羽で飛ぶもの (鳥) との戦い
- 17a. 牡ウシとミソサザイ
- 17b. ミソサザイとクマ
- 18. キツネもやっぱり騙される
- 19. 足の速いカエル
- 20. 子どもとヘビの王さま
- 21. 痛い目にあうものもいれば、嘲るものもいる

第Ⅱ部 魔法メルヒェン

- 22. 七つ頭の鳥 (「ソルブの民話 4」に掲載、以下同様)
- 23a. 寝過ぎ女と強力息子ごうりき
- 23b. 三人の仲間と灰色の小人
- 23c. 三つの指輪

24. 十二人兄弟（要旨）
25. 森番の二人兄弟（要旨）（「ソルブの民話5」に掲載、以下同様）
26. 教会の中の幽霊
27. 緑鬚
28. 小さな兄妹

4. 編者パウル・ネド年譜

1908年11月1日：ヴァイセンベルク近傍のコティッツに生まれる。母親は洋裁師、父親は機関車のボイラーマン。

1922-28年：ライプツィヒ大学で教育学と民俗学を専攻。

1932-37年：高地ラウジッツで様々な教職につく。

1933年：組合連合組織「ドモヴィナ」の委員長に選出される。

1937年：ナチスが「ドモヴィナ」の活動を禁止する。それに伴い免職となり、ラウジッツからの追放処分を受ける。

1937-45年：ベルリンで職を転々とする。兵役。

1939、1944年：二度にわたり逮捕される。

1945-50年：「ドモヴィナ」の委員長、パウツェン北部区域の督学官、ソルブ文化・国民教育局長に就任。

1951-52年：ザクセンの国民教育省の芸術文化部門長官に就任。

1952-61年：ライプツィヒ素人芸術中央院の学術長に就任。

1955年：『ソルブの民話—概説と注釈をほどこした体系的文献一覧—』（ソルブ民族研究協会論文集第4巻、パウツェン、ドモヴィナ出版社）により博士号取得。

1955-63年：ライプツィヒ大学で教壇に立つ。

1963年：『ソルブ民間文芸概説』（ソルブ民族研究協会論文集第32巻、パウツェン、ドモヴィナ出版社）により大学教授資格取得。

1963-68年：ベルリン-フンボルト大学民俗学研究所教授。

1984年5月24日：ライプツィヒにて死去（享年75歳）。

【付記】

当該書の翻訳に関しては、ソルブ協会（バウツェン所在）のアネット・ブレザン氏に1998年6月8日付けで許可されていることを付言しておく。